ふくしまから伝えたいこと、知らなければいけないこと。
ふくしま学（楽）会の成果と課題

早稲田大学環境総合研究センター・早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター

松岡俊二*、永井祐二、李洸昊*****

*早稲田大学アジア太平洋研究科、**早稲田大学環境総合研究センター、***早稲田大学環境・エネルギー研究科

地域の多様なアクターによる多世代交流の「場」づくり

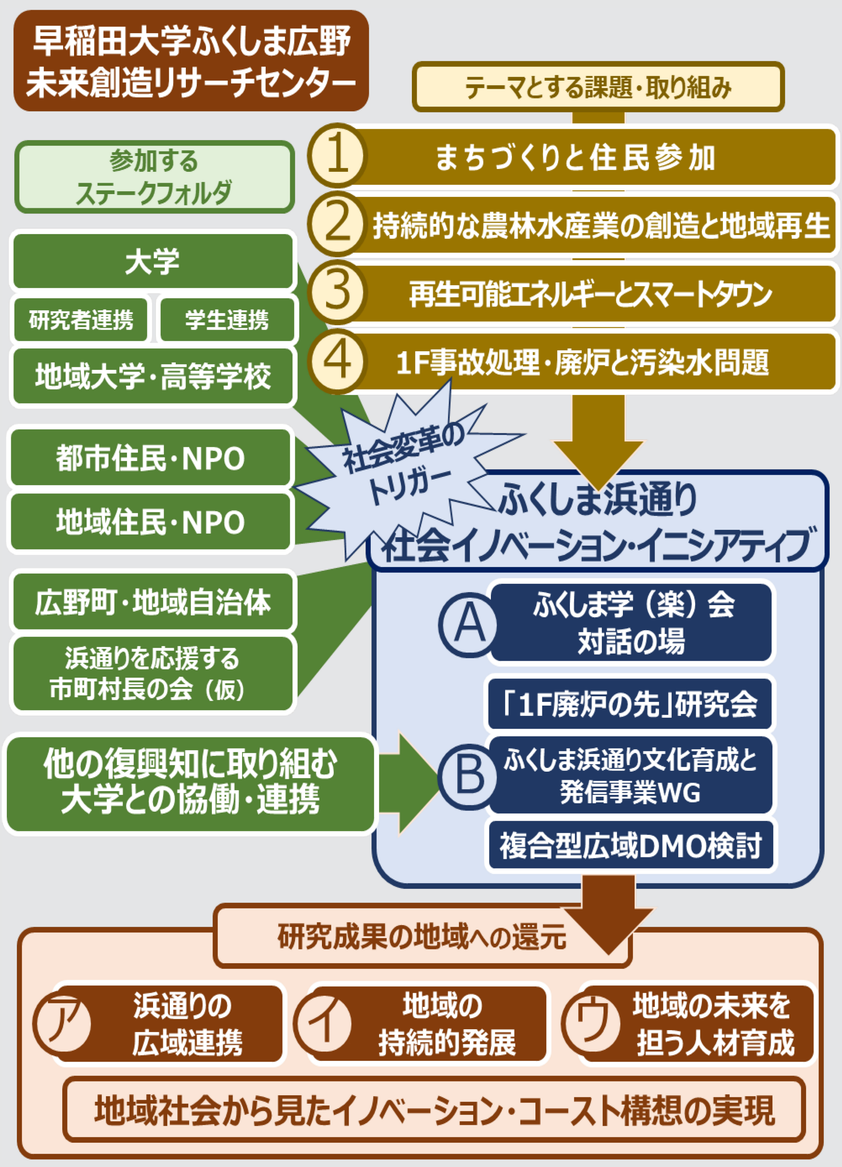
福島県浜通り地域は、まだ県内外への避難者が多く、一方でこの地域を中心に国や県が進める福島イノベーション・コースト構想は、地域内に外部からの作業員などの転入者を多く招いている。このような特殊な状況において、国や県は復興促進のために各地方自治体に補助金などによる支援を展開しているが、地域再生にとって最も重要である住民参加型まちづくりが弱い。

また、地域団体や行政が何かのまちづくり事業を推進しようとしても、若い世代の参加が少ないという問題もある。このような状況を改善するために、ふくしま学（楽）会は地元のふたば未来学園高校の高校生、NPO関係者、地域住民、行政、大学の研究者が集結し、世代や立場による「しがらみ」を越えた対話の場を設定している。

ふくしま学（楽）会の概要

2017年5月に開所した早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターは、長期的・広域的な視点から原子力災害からの地域社会再生について調査研究してきた。2018年1月からは、世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて福島復興について議論する場として、ふたば未来学園の高校生や地域社会、NPO、国や地方の行政、大学などの多様な人々の参加による「ふくしま学（楽）会」を開催している。この手法は、多様なアクターによる場の形成（知識創造プロセス）と多様なアクター間における社会的受容性の醸成（資源動員プロセス）という2つのプロセスの相互関係としての社会イノベーションの創造プロセスの解明にも有益である。

本事業の概念図

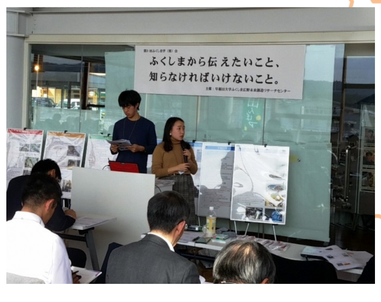


第3回ふくしま学（楽）会の成果（2019年1月27日）

第3回ふくしま学（楽）会では、2018年8月4日に開催した第2回ふくしま学（楽）会で4つのテーマについて横断的・包括的な議論を行った結果、各テーマの論点を明確にすることができた。第3回ふくしま学（楽）会では、長期的・広域的な観点から「何が重要なのか」、「今、何をなすべきか」を主眼にして議論を行った。

特に、パネル・ディスカッションの基調報告では、2050年に海外・県外からの宿泊訪問者が年間100万人を超える活気あふれる持続的な地域社会を創るという「ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI構想）」が提案された。

今後のふくしま学（楽）会の開催時期は、第4回は2019年8月3日、第5回は2020年1月26日を予定する。

社会イノベーション・イニシアティブ（SI構想）は2050年に、常磐炭鉱（いわき）、広野火力（広野）、2F（楢葉・富岡）、1F（大熊・双葉）、アーカイブ拠点施設（双葉）、復興祈念公園（双葉・浪江）、原町火力（南相馬）と南から北へ続く「エネルギー産業遺産・原発事故遺産・震災復興施設のネットワーク」を作り、1Fやエネルギー遺産群を核とした「ふくしま浜通り芸術祭」、復興まちづくり体験・エネルギー体験・農業体験・林業体験・漁業体験に農泊・渚泊などを組み合わせた「広域DMO」の創造の3つを設定する。

これら3点を社会イノベーションとして創造すれば、2050年に観光入込客（県外・外国・宿泊）が100万人を超える浜通り地域となる。